学年表（通年）や索引も正確で二〇頁を費して豊かさと温か味を添えている。これを重たい大著の Topley & Wilson's Principles of Bacteriology, Virology and Immunity 新刊などと比べる愚はいわないが、軽快新鮮さにおいて I.M.Roitt: Essential Immunology や D.F.Gray. Immunology より断然優れて嬉しい本である。

（山中　太木）

〔近代出版　一九九〇年　B五判　二一三頁　定価二、〇六〇円〕

立川昭二著『最後の手紙』

死を目前にした故人の最後の一言は、その人の人生の最後を飾るしめくくりの言葉として重みのあるものである。それは人々に感銘を与え、私たちの胸を強く打つものがある。本書の著者もまた「人が最後に書く手紙は、その人の本質をもっともはっきりと表わし、その人の生涯をもっとも集約したことば」と受けとめ、そのことばに耳をかたむけることにより「そこからは、人はどう生きるのか、人はどう死ぬのか、愛とはなにか、運命とはなにか――について、凝縮したことばが聞こえてくるはず」であると、本書の「はじめに」の中で記している。

よく知られる通り、著者はかねてから、人の死のかたちは時代により社会により異なるものであり、それをもっとも基本的に規定しているものは死因構造である、ということを主張されてきた。そして医学史や疾病史への深い造詣により、飢えやペストで人々が死んだ時代から、交通事故やガン、脳卒中などが死因となった現代へと、その死因構造、疾病構造の変遷をその時代と社会という観点から考察して、既に多くの著作を世に問うている。

本書もまた、単なる故人の遺書や辞世の収集というものではなく、「その人物の生き方や思想がもっともはっきり表われた最後の手紙は、その時代をもっともはっきり写し出した鏡のひとつでもある」との視点から、その死のかたちを規定したその時代と社会を探るものとなっている。ここでは、明治から現在までを四期に分けて、各時代それぞれ八人の「最後の手紙」を紹介する形をとっている。

即ちまず明治大正期を「時代の鼓動」と名づけて、病死した正岡子規、石川啄木、夏目漱石、森鷗外と、自死の藤村操、乃木希典、松井須磨子、有島武郎とをとりあげている。

次に戦前の昭和期を「彷徨する魂」と呼んで、芥川龍之介、野口英世、宮沢賢治、竹久夢二、寺田寅彦、立原道造、種田山頭火、河上肇らについて述べられている。

また戦中の昭和期は「山河はるか」として、佐々木清美、中村徳郎、鈴木肝一、佐々木八郎、竹内浩三、鈴木実、小西貞明、山本幡男の八人を紹介している。

そして最後の戦後の昭和期を「繁栄の陰で」と名づけて、原民喜、樺美智子、高野悦子、岡真史、西川喜作、亀田千春、山野井道子、土岐雄三らを紹介して解説を加えている。

これら個々の記載は夫々にいずれも感動的であるが、ターミナ

ル・ケアのあり方が議論され、尊厳死の運動やホスピスの試みが進められる今日の関心からは、特に西川喜作と土岐雄三とが注目されるかも知れない。即ち、千葉国立病院精神科医長の西川喜作は、自らガンと知ってから現代医学においていかに死がおろそかにされているかを身をもって体験し、「死の医学」を最後のテーマにと決意した、と記されており、また老作家の土岐雄三は、「一切の食事、医療を拒否仕り、あの世へ参ります」と延命医療に対して果敢に戦いを挑んだ、と述べられている。

著者は本書の終わりに近く、次のように述べている。「現代医療は人の死を見えにくいものにした。死があいまいになれば、生も愛もあいまいになる。『これが最後』の『最後』はますますあいまいになる。……『最後の手紙』をだれにたいして、どう書くか――、それは死に直面した時の事柄ではなく、日常の生のいとなみの中にある事なのである」と。

本書は若い人々を目標に書かれたといい、平易な文章で明快に解説されているが、その内容は深く、その論旨は鋭く、広く一般の読者に対して、日本人の死生観を考える上で大きな示唆を与える好著といえよう。

（津田　進三）

〔筑摩書房ちくまプリマーブックス四四　一九九〇年　B六判　二三四頁　定価九八〇円〕

高山直秀訳注

『アンブロワズ・パレ　歯科口腔病医学、補整・矯正・義肢論』

訳注者の高山直秀氏は、われわれ歯科にとって貴重な人である。彼は都立駒込病院小児科に勤める医師だが、歯科に造詣がふかい。

昭和五十九年に、『フォシャール歯科外科医』（医歯薬出版）を翻訳出版された。原著者P・フォシャールは、十八世紀前期に先駆したフランスの歯科医で、「近代歯科医学の父」と謳われる。彼は一七二八年、世界で最初の歯科医学書となった『歯科外科医』を著わした。二巻からなるこのフランス語の原著が、高山氏によって日本語に全訳されたのである。

それは、大業である。歯科医学の原点ともいえるパイオニアの業績を、われわれはつぶさに知ることができた。歯科医師は、高山氏に満腔の感謝を捧げなければならない。

その高山氏がこのたび訳出されたのが、本著『アンブロワズ・パレ歯科口腔病医学、補整・矯正・義肢論』である。いうまでもなくパレは、近代外科学の父と尊崇される十六世紀のフランスの外科医である。われわれ歯科医師にとっても、偉大な先人だ。彼は、一五七五年にフランス語で『パレ全集』を著わした。大判八五〇ページにおよぶ大著である。

そのなかから、高山氏は歯科口腔病に関する記述を逐一チェックした。当時、歯科は未だ独立した科ではなく、パレは歯科医療